新年のご挨拶

圭陵会会長　齋　藤　和　好

新年おめでとうございます。

岩手医科大学創立120周年記念式典が、先人達の築いた建学の精神を胸に誓い合い、盛大に行われたことがつい先日のように思い出されます。

9月21日には、広く迅速な医療を行う「内丸メディカルセンター」と、高機能化、災害備え等も有し、専門治療を行う、地域に根ざした最先端大プロジェクトの「矢巾新病院」が同時に誕生致しました。

昨年10月に、第72回岩手日報文化賞をいただいた小川理事長先生（おめでとうございます）は、『誠の人間』としての人間形成のもとに「世界に冠たる新病院を目指して頑張ろう……」と、強調しておられます。

高規格の新病院は立派に完成致しましたが、記念募金がまだ十分でない様子ですので、「財政面を強固」にするためにも物心両面から更に絶大なる支援をいたしましょう。

国家試験の低迷については、皆様も心配なさっていると存じますが、大学は自習室を確保する等のハード面だけでなく、教員特に学生の意識を変えるようなソフト面も徐々に向上させております。

岩手医科大学は「厚生済民」「誠の人間の育成」の創立理念のもと、医療、教育、研究の三本柱にて、教職員圭陵会一丸となって、創立130周年に向かい新しい医科大学を造っていくでしょう。

我々圭陵会員も一致団結して、母校の発展のため努力して行くことを誓いつつ、併せて今後共、皆様のご支援をよろしくお願い致しまして、私のご挨拶といたします。

「ああ、生々の徳のあと……」（校歌）

新年のご挨拶

学校法人岩手医科大学　理事長　小　川　　彰

皆様明けましておめでとうございます。

昨年秋、矢巾キャンパス新附属病院（本院）が稼働しました。創立以来百二十有余年の歴史を繋いできた内丸を捨てたわけではなく、内丸には外来中心の病院としてメディカルセンター（分院）が再発足しました。内丸メディカルセンターは盛岡駅からのアクセスを生かし「外来中心」として、矢巾本院は「高度治療」としての役割を持たせ、両病院間は9㎞もの距離がありますが一体運用とする事としています。

多くの大病院は、増築を繰り返し、大きくなって来ました。その結果、病院のレイアウトが「患者さんの為に」という病院の目的から離れつつあります。新病院は①「高齢化した患者さんを歩かせない」とのコンセプトの下、患者さん周囲に各種診断、治療機器や外来が配置されています。複数の診療科を短時間・短距離で受診できる工夫です。②全国多くの大学病院は、病院と医局（臨床研究棟）は異なった建物にあり、病棟で患者さんが急変しても直ぐには行けません。医局が患者さんのそばにはなく、研究室のそばにあるのは研究中心だからです。本学は学是にあるよう地域医療のための大学であり患者中心です。「医療人は患者のそばに」のコンセプトの下、各階の患者さんのそばに医局も配置しています。③8年前、C敷地の田んぼの中にドクターヘリの基地が「ぽつんと一軒家」の様に出来ました。内丸での着陸場は東警察署屋上で、救急センター搬入まで約20分かかっていました。新病院ではヘリ基地の真ん前にセンターがあり30秒で搬入出来、隣には高度診断機器があり、手術室への専用エレベータがありますので時間短縮は目を見張るものがあります。この結果救命率が大幅に向上することが期待されています。

矢巾の新附属病院（本院）には国内外から多くの見学者が訪れていますが「大変良く考えられている素晴らしい病院だ」との評価を頂いています。同窓生の皆様には、新病院キャンパスをご覧いただければと思います。敷地内にはホテルルートイン矢巾岩手医大病院があり、宿泊にご利用いただけます。

一方、矢巾新附属病院はここ十数年積み立ててきた原資でスタートできるはずでした。しかし、最近の経済情勢はそれを許さず、借金せざるを得ませんでした。本来であれば直ちに内丸メディカルセンターの新病院建築に着手・内丸再開発に着手する予定でしたが、借金返済の目途がつくまで当面延期せざるを得ません。皆様にはこの窮状もご推察頂き、物心両面のご援助をお願いする次第です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

新年、おめでとうございます

岩手医科大学　学長　祖父江　憲　治

明けましておめでとうございます。圭陵会の先生方におかれましては、御家族共々に健やかな新年を迎えられましたこととお慶び申し上げます。また、日頃より本学への温かい御理解と御支援を賜っておりますことに感謝申し上げます。

本学にとりまして、昨年はまさに激動の１年となりました。昨年７月には先生方にご支援頂きました岩手医科大学附属病院（矢巾新病院）が完成して落成式を挙行し、圭陵会の諸先生方にも多数御来駕賜りました。同９月21日は内丸旧病院から矢巾新病院への入院患者さんの搬送が行われ、無事完遂することが出来、９月24日より矢巾新病院の外来と、内丸メディカルセンター業務を開始し、現在に至っております。患者さん搬送に際しては、岩手県・盛岡市・矢巾町など各自治体・県医師会と歯科医師会・県警・消防署・自衛隊から県内の県立病院を始めとする各病院・北海道と東北の各大学病院などのご協力を頂きました。また、搬送当日は盛岡市・矢巾町をはじめ周辺住民の皆様が車での外出を控えて頂き、スムーズな運行が可能となりました。このように、巨大病院の患者搬送という一大プロジェクトが、何一つトラブルなく完遂出来ましたことは、多くの皆様のご協力によるもので、心より感謝申し上げます。矢巾新病院と内丸メディカルセンターの外来患者数と入院患者数も、移転前の状態に回復しつつあり、矢巾新病院と内丸メディカルセンターの役割分担と特徴を生かしながら、岩手県のみならず北東北・東北の医療中核拠点としてさらに発展すべく努力してまいります。

内丸メディカルセンターでは、当面は内丸の現施設（中病棟１～３階、循環器センター・歯科医療センター）を使用して、医科外来と歯科全般医療を行っておりますが、建物も老朽化しており、早い時期に新改築に向かうべきであると考えております。

矢巾新病院と内丸メディカルセンターは、医療系総合大学として医・歯・薬・看四学部の学生諸君にとって、壮大な実地教育病院となりました。また卒後の医療人教育においても、本学のみならず全国からより多くの医療人を受け入れ、高度専門医療人として育成し、本学から岩手県、北東北、東北さらには日本全国へ輩出してまいる所存です。このためにも、その中心となる卒後臨床研修センターの機能充実に努めてまいります。

学生教育につきましては、全国的な問題となっている低学年クライシスと言われる現象が顕著になっております。大学への入学が人生の最終目標で入学後に将来の目標を失う、勉学方法（ラーニングスキル）が分からないなど、原因は様々です。この低学年クライシスをクリアー出来ないまま進級した学生は、高学年になってついていけないという事態に陥ります。早期に低学年クライシスを見つけ出し、解決することが重要で、教育現場の教員共々留意しながら、学生諸君に明日へ向けた希望を持たせる大学にすべく努力してまいります。学生諸君の勉強環境整備としまして、A敷地での勉学スペースを広げると同時に、矢巾新病院建設にあたり新病院と店舗棟にSGLの勉学スペースを新設しました。また、圭陵会の諸先生方には大変に御心配をおかけしております国家試験につきましては、各学部とも必要に応じた教育方針の見直し、学生対応の個別指導など、きめ細かな教育体制を整備するとともに、予備校などの協力を得て、万全を期しております。

時代と共に、世相を反映して学生気質も大きく変わっていきますが、いかに世の中が変わっても自己のidentityを失っては、その存在意義さえ問われることになりかねません。このidentityの根底にあるのは、愛校心であり愛国心ではないかと思います。学生諸君にとって勉学は当然のことですが、卒後に医療人たる前の心構えと母校を思い出すそんな大学にしてまいりたいと考えています。

圭陵会の先生方の御支援により、矢巾新病院が開院の運びとなりましたことに、心よりお礼申し上げます。また、先生方におかれましては、今後ともに御指導賜りますことをお願いしまして、新年の挨拶とさせて頂きます。